

新しい極真空手（手塚グループ）

極真空手の継承と発展

はじめに

手塚グループの極真空手を継承と発展させる基本理念は、「家族」「対話」「自然」です。この数十年間多くの活動をしてまいりました。そして多く青少年を社会に輩出してきました。そこで、今後多くの道場生・後輩のために「新しい極真空手」を紹介させていただくことにしました。なぜ、このような「新しい極真空手」を紹介するかといえば、極真会館の伝統を正しく後世に伝えたいということで、青少年に対して健全な教育をすること、世界へ更なる極真空手の普及に努めたいがためなのです。この「新しい極真空手」で、本来目指すべき極真空手を世界で学ぶ極真道場生、さらに、指導者やご父兄に手塚グループの空手教育の一端を知って欲しいと思うのです。

第一章手塚グループの誕生

第一節手塚グループの理念

一

極真空手の危機

現状に立ちってみるときに、極真空手が伝統を失い、相当危機的立場に立っていると感じています。それは、私たちが、大山総裁亡きあと遺言状の無効の訴え、最高裁で勝訴しました。訴えられた側の人間は組織の私物化、極真会館分裂など、裏社会の背景で執着しました。そして、極真会館を一本化できない現状に腹ただしさを感じるのです。極真会館は、空手母国日本、アジア、あるいは欧米を巻き込んで、日本を発信源として、日本の相似的になって分裂してしまっただけです。

二

手塚グループが現れる背景について

本来の大山総裁が築いた極真会館の責任を負うべき指導者が、その使命を全うし得ず、分裂に分裂を重ねている状況になった場合、どうすればよいのでしょうか。その本来の使命を受けている者が、全うし得ず、いい加減な立場に立った場合、正しい精神的使命を持った者が、大きくその分までも兼ねて全うしなければならないということは、当然の立場であります。

また、今極真会館が精神教育の使命を全うしているかということ、現実的観点からみると否としか言えないのです。ましてや武道教育としての展開をすることができるかということなかなか難しい内容になっています。さらに、空手界が一致団結して、オリンピックの種目としての出場も果たせない現状になっています。また、対地域社会に対して活動してい

るかという、余りにも消極的な極真空手になっているのです。

では、極真会館が使命を果たせなければ、精神的国民運動を巻き起こすことができる団体が生まれてこなければならないのです。それが手塚暢会長を中心とするグループであるとうことは言うまでもありません。

私たちは、既存の分裂した極真グループを否定するのではなく、守っていくと同時に、極真空手を発展させ、社会の道德倫理の腐敗と青少年健全育成を、防備しなければならない責任を持っているのであります。

三

極真会館手塚グループの使命

手塚グループは、「家族」「対話」「自然」の理念を掲げて、社会に影響を与えていくことができるように実践し、歩みを進めてきたのです。単に個人ばかりでなく、手塚グループが、地域社会に貢献してきました。さらに、国民運動と世界展開していくために、責任持ってきたのです。

これからの極真会館手塚グループは、日本から世界へ、武道教育の論理を展開することは、言うまでもありません。いくら精神的立場が立派であるといえども、多くの人々を武道教育で完結して初めて、全体の目的を完成するのであります。この観点なくして、極真空手道の道理が通らないのであります。手塚グループは、選手育成よりも礼儀を重んじる子供たちの育成に力を注いでいるのです。

しかしそこには、青少年の教育的立場が重要なのか、それとも精神的立場が重要かという課題を掲げるのです。私たちは、はっきり、精神的立場が重要であると断言いたします。精神的立場は、正しい伝統のためであり、その立場が重要で主体的立場に立つのです。そして教育的立場は子供たちのためにあるのです。その観点からすると、正しい伝統を重要視せざるを得ないのです。

学校の校長が教え子とみだらな関係を続けていたニュースが飛び込んできました。さらに、校長が保護者と校長室で性的関係に及んで、保護者を臨時職員に雇ってまでも、性関係を続けていたという精神的立場が崩壊している教育現場のニュースも辛辣に耳にします。実に嘆かわしいばかりです。まさに、教師として精神的立場を忘れたために起きた事件なのです。

私たちの精神的立場の伝統が個人を通して、家庭、国家を超えて世界に発展をもたらせるのであります。それが手塚グループの正しい精神的立場の伝統なのであります。そこには、家族という理念ゆえに、どのように教育しなければならないかを自覚しているのです。当然、不倫や浮気等、家庭を崩壊させる行動は戒めとして第一に提言しているのです。道場生や指導者は、当然破門として扱われるべき事なのです。

第二節

手塚グループの理念と経緯

一

家族

今までの極真会館から、新しい極真会館への未来を望むことが、これからの手塚グループの課題であります。極真会館の今までの歴史を繰り返すために手塚グループが存在するようになったのではないのです。その理想とするところの結論は「家族」なのです。

私は、極真空手の理想をしっかりと示すために道場を運営しているのです。これからの極真空手の理想を世界中の師範と道場生と分かち合うためにいるのであります。極真空手は青年達の希望と夢と理想でありました。そこには、今までの空手道を継承して新しい試みに満ちているのです。手塚グループの存在理由は、「家族」にあるのです。

極真会館創立前の同じ空手道を見るのにも、非常に違った観点から、様々な解釈を持って今まで歩んできたのであります。そして、極真空手を歩み続けた私としては、関心事が空手に関する解釈ではなく、極真空手の真髄はどのようにあらなければならないかということなのです。つまり、どうあれば本当の極真空手道として確立するかであります。

したがって、私が必要とするものは、新しい極真空手の考え方であります。空手そのものの本質を示すものであり、その内容は今までの考え方をはるか越えたところから生まれてくること間違いのないのです。それゆえ、私が求めていくのは、極めて新しい内容になるのです。この事を総裁に進言し、あるべき姿を提示してきたのですが、残念ながら願うことなく、総裁の死を迎えざるを得なかったのです。

二

極真会館の転機

極真会館は大きな転換点を迎えたのでした。すなわち、大山総裁が亡くなった時、この時が一つの重大な転換点の時であり、新たなる変革の時といっても過言でないのです。すなわち、大きく大山総裁の伝統を引きついで新たな方向性に出発すべき決定的な時だったのでした。

それでは何故、大山総裁が亡くなった時が、重大な転換点なのでしょう。かつて、大山総裁はあまりにも偉大な業績を残したのでした。しかし、それは、あまりにも広範囲な世界的レベルで同時的に展開したがために、粗雑で整理していかなければならないことばかりなのです。当然開拓者という人たちはこのような状況であったのだと思います。

ところで、空手の目的は何でしょうか。人間が人として喜べる基礎的内容を空手道から学ぶところにあるのです。原点は「家族」を学べということになるのです。もちろん、空手道は、当然戒めがあるのです。暴力をふるってしまったならば、空手道の意味は根底から崩れていくのです。当然暴力を振るわないということは大前提になるのです。これは戒めなのです。さらに、家庭を崩壊させてはならないという戒めもあるのです。それは、家庭を維持できない関係を否定するのです。浮気であり、不倫ということにもなるのです。

私たちの空手道は、空手の稽古を通じて成長期間を全うしていくのです。なぜなら、本当の伝統を立てようとするからなのです。空手道を通じての完成基準に達したとき、誰もが認める人格者として出発できるのです。ただ、強いだけでは本当の意味はないのです。

三

極真手塚グループと他団体との相違点

空手道における純粋な追及心は、中途半端で終わっているような気がするのです。今までの空手道を見ると空手の目的である人間完成は、どうなっているのでしょうか。意外と、誤った選択をし、その結果今のような分裂状態であるとするならば、はじめに、空手道というものが意図したものと違っているのであると思うのです。

比較対象としては、極真会館の分裂はもちろんのこと、極真空手と伝統空手に見ることができのです。極真空手は、一般に受け入れられて、伝統空手は、大会を観ても世間から隔離されたように、理解しがたいものになっているのです。勝負の行方が専門家でしか理解できないのです。ある意味で世間一般からの指示を受ける資格を失って、自ら作り出した虚構の中で曖昧になっているのです。

極真空手のような実践空手は、今国民に受け入れられて益々大会や活動がはなはだしく、盛んになっているのです。ある意味で、多くの実践空手の先生方は、あらゆる活動と創造に熟知してきているのです。実践を通して、暴力という間違いを起こさず、真の伝統を立てるべく期待されているのです。

空手の最終目的は人間完成と定義しましたが、一人の男性として、あるいは女性として完成の極致を求めた結果、修道士やシスターでない限り、お互いが、家庭を持つという段階に入ると思うのです。さらにお互いが、夫婦として社会に荒波を乗り越えていくことができる精神力を身につけることが大切なのです。それが実現されるならば、家族として繁栄していくことになるのです。手塚グループはこの点を強調するのです。

極真会館に対する私の計画は、極真空手が家庭から世界の家庭を巻き込んでいくことなのです。それは、世界中の指導者の一致した意見なのです。ポーランドの合宿での世界中の責任者の声なのです。ヨーロッパ人のアラン師範は先頭に立って指導しているのです。あらゆる極真空手の繋がりが、家族同士の繋がりになってくるのが極真会館手塚グループなわけなのです。極真空手は不思議に、家族を中心に、国家意識、世界意識が打ちたてる事ができるのです。

そして、はじめから終わりまで、極真空手が世界を覆い尽くすに違いないと信じられるのです。というのも、極真空手の言葉は、世界中どこに行っても同じなのです。「キアイレテ」「セイケンチュウダンズキ」と同じ表現をするのです。このように世界の極真会館は、空手道を通じて同じ世界人に属するように思えるし、極真空手の用語がすべての世界中の人たちの用語となっているのです。

その意味では、実に、全世界が極真空手のもとに一つの世界であるかのようなのです。

これは、不思議だと思うのです。まさに、私が、思っていた一つの世界であるかのようです。世界中どこに指導に行っても同じように楽しめる世界の確立になるのです。これが、私が掲げている初めの青写真であります。

このような極真世界ができれば、分裂騒ぎを起こしている世界など存在しないのです。いったい矛盾ある世界、つまり、戦争と闘争の世界は皆無に等しくなるのです。極真空手の世界には本来の夢と理想を実現する以外には道を求めようとしても求められないのです。極真空手の理念のみが、本来の世界を築けることができるし「家族」を維持させる基盤になるのです。

四

今までの裁判と経緯

闘争と分裂は、今始まった内容ではなく、人間有史以来続いてきた問題なのです。闘争と分裂は、まさに人間に必要なになってしまったと思えるぐらいはびこっていることは間違いない事実です。そういう意味で、極真会館というものの現状をさらに調べてみたいと思うのです。

闘争と分裂の原因を作った人物と言え、とりもなおさず、私の弟子であった松井章圭氏ということになります。遺言書の内容に果敢に挑んだのは、遺族を中心とした、私を含めた5人の支部長でした。私たちが主張するように、公認されないまま、偽造された遺言書で偽りの後継者に引き連れられた結果になってしまったのです。この判決は最高裁で松井章圭氏の敗北として審判が下りました。

しかし、極真会館を取り巻く、思惑を持った人達は、その後継者を取り違えてしまったことになったのです。私たちは本当の遺言書に記されている後継者から離れて、偽りの後継者である松井章圭氏と一緒に仕組んだのです。こうして、極真会館内部に分裂と闘争が生み出され、何個かの団体が極真会館の松井章圭氏ゆえに分裂を繰り返したことになったのです。

偽りの指導者のもとに、極真会館は、許しもなしに、不法にも団体を維持しているという結果が生まれてしまったのです。そして、極真会館が分裂したまま発展する中で、その道場生達も、松井章圭氏に加担するもの、また反対する者と、あまりにも複雑な思いが展開する団体になってしまったのです。

極真会館が本来の後継者を中心としなかったがゆえに、ある意味で、お互いが不信の世界、憎しみと争いの世界が生まれたとって過言でないのです。お互いを尊重することなく、大会にも出場を認めないなど、その精神は極真魂となんら関係のないところまで落ちぶれてしまったのです。さらに、そのエゴは考える事が出来ないほど、保身にのみ走ってしまいました。

そして、極真会館全体もお互いに認めない、破壊し合いながら、何の苦痛も感じる事ができないのであります。これはまさしく、有史以来の闘争と分裂のなにもものでもないの

です。まさしく、醜さが充満しているといってもよいのです。実にこの極真会館には大山総裁の伝統を正式に継承する人物なき殺伐として団体として映るのに間違いはないのです。

私たちは、この極真会館が、大山総裁によって創設されたことは誰に認められているのです。しかし、もう大山総裁の伝統を率いる群れとなっているとは考えられないのです。なぜなら、極真会館の責任者と思惑を持った人達が、結果的に偽りの指導者として松井章圭氏を認知してしまったことによるのです。

松井章圭氏をとりまく道場生は本来の大山総裁を裏切り、偽りの指導者と手を結んだということと、同然のことになってしまったのです。

それゆえ、偽りの松井館長がずっと今に至るまで、指導者として君臨してきているのです。

五

理想を求める「夢食の会」

そこで、本来の極真会館の理想を求めていこうとする運動が、負の遺産として松井章圭氏を生み出した私が、微々たるあゆみではありますが、積み上げてきたという事実を私たちは検証するのであります。私の心は、裁判に勝利しながらも、極真会館を見るにあたって生きながら死んでいる如く、深く悲しい心を持って歩んできているのです。

松井章圭氏が自らの過ちを認め、今の立場を断ち切り、本来の姿に至るということとは、できないと私は思っているのです。しかしながら、もし戻ってくるとしたならば暖かく迎えてやろうとする心だけは、十二分にあるのです。

それゆえ、本来の極真会館に戻すことを夢として、「夢食の会」会長を自称するのです。さらに、新しい方向に極真会館を引っ張っていこうとすることをやめようとはしないのです。すなわち、極真会館を本来の方向に仕向けて行こうとする決意があるのです。

まさに、極真会館の病んだ病状を的確に判断して、正常な健康状態へと回復させようとするのであります。それが、手塚流治療方法なのです。今まさに、溺れている極真会館であるので、極真会館を水から引き揚げて乾いた陸地に返すようなものです。すなわち、救助しようとしているのです。これと同様に、異常な状態の極真会館を、私が積み上げてきた本来の状態へと遅々たるあゆみですが、手塚グループをモデルケースにして、叱咤激励しているのです。

極真会館の改革に対して絶対的決意表明をしているのも私なのです。最初の動機は極真会館を何とかしなければならぬということでした。そして、そう決意をしたからには必ず行うという強い決意でありました。そこから、ロシアに毎年指導に行くようになり、ボリス師範との絆が生まれ、ヨーロッパでは、アラン師範がサポートし、決定的な世界をまとめる役割を持つに至って出発したのです。

私は、これからやるかもしれないと言ったのではなく、必ずやると宣言して、外国への啓蒙を続けたのであり、もうすでに三回に及んだ、ヨーロッパのサマーキャンプというこ

とになったのです。ではどのようにして、それを実行するのかですが、それは、「家族」「対話」「自然」という理念に基づいての発想でした。

極真会館の新しい方向性がいわゆる三大理念なのです。本来の極真会館を形成する大切な理念として動いているのです。今までの私たちの歩みは、極真会館にまぎれもない、存在感というか、改まって言うならば、本来の指導権を立てていこうとするのです。これが私たちの着陸地なのです。最後まで歩いてみて、最後の勝利者として栄光を表すまで戦いは続くのです。

第二章 師大山総裁と手塚グループ

第一節

師大山総裁の継承

空手道に生命をかけた大山総裁が、歩んだ空手道の道は、平坦な道ではなかったということを経験的に伺い知ることができるのです。大山総裁が、空手の稽古を始めたのは、自宅の庭先からでした。その後、西池袋の元バレエ練習場を道場として借り入れて、「日本空手道大山道場」の看板を掲げたのです。

大山総裁は、「武の道において千日をもって初心となし、万日の稽古をもって極める」と座右の銘として語っておられました。まさに、茨の道、血を流す道、生死の境の開拓の道を歩まれたことは言うまでもないのです。万日といえば、30年近くの歳月なのです。

私の姉が大山総裁の秘書でしたので、いつの間にか千葉県支部長を仰せ付けられていたのです。それでも、雑務に追われて空手指導ができない日々も過ぎました。身体が弱り果てていくことを痛感し、空手への執念を再び燃やそうとする日々でありました。空手ができないということは、肉体の衰弱というよりは、精神力の衰退を意味したのです。空手は、私の地域社会に対する提言であるといっても過言でなかったのです。その「万日の稽古を持って極める」とう大山総裁の座右の銘は、今にして実感させられるのであります。心を極める、道を極めるという意味での極真という言葉は、まさに真実を極めるということに他ならなかったのです。

しかし、大山総裁の本当の意味での極真は、私の抱いた意味とニュアンスが違ったのです。それは、「真実を極めた空手は極真空手である」ということを池袋の本部道場での会議でよく聞いたのです。「君たち分かるか、極心流とかじゃない。」と何度も語られたのです。大山総裁の心の中には流派のように極真空手を意味づける事に関しては、激怒する場面もしばしばあったのです。その証拠に「This is Karate」という英語の本を出版されていることから伺い知ることができるのです。つまり、極真が本当の空手であって、今後すべての空手が極真空手になっていくことを確信された言動であったのです。

このようなことを考えてみた場合、今の極真の状況は大山総裁の嘆きでしかない結論づけることができるのです。極真がなにになに派として分裂していく悲しみは勿論、生前生

きておられた苦難の嘆きとも比較にならない気持ちが湧き上がってくるに違いないのです。そのような意味からすれば、今我々はいかなることをしていかなければならないかを検討すべきなのです。

大山総裁を師として尊敬した道場生は、今こそ総裁の願いをかなえて戦うことが使命なのです。総裁が私たちを極真空手に立脚させ、育み、指導者として勝利的人生の立場を得させてくださったことを考えなければなりません。これは、私たちの使命に終わるのではなく、大山総裁を慕った道場生の使命として連結させていかなければなりません。ここで私たちが責任を負っていかなければならないという信念を持って立たなければ、大山総裁の前に面目が立たないのであります。

そういう意味において、これから難しい道が横たわっているのです。必ずや極真空手を標準として大山総裁の心を持って越えていかなければならないのです。

第二節

師大山総裁の継承と発展

創始者大山倍達は、極真会館を創設するに当たり、空手道に対する特別な理想を持っておられたのです。その理想は、今の極真会館をはるかに上回るところに置かれていることには間違いないのです。

その理想は、創始者大山倍達の心の中で育てられ、世界を相手に戦う中で共に成長し、その心のベースの延長に理想はあるのです。極真会館の存在は、創始者の偉業を広め、そのベースのうえに、空手道を通じての人間完成の目的を立てているのです。

そして、その土台の上に、変わらざる創始者大山倍達の提唱した「頭は低く、目は高く、口慎んで心広く、孝を原点として他を益する」という極真精神が、空手道を通じて人格の陶冶と心身の鍛練をはかり、社会貢献を遂行しているのです。それは、我々に対する大いなる恵沢である事は間違いないのです。この空手道は、我々だけのものではなく、創始者大山倍達の心の延長のすべてが全世界の道場生に加担された熱き魂に他ならないのです。

この極真空手を通じて極真精神を身につける事が、人生の勝利者として栄光が充満した人間として成長するだけでなく、指導者・勝利者のモデルとして、誰もが認めざるを得ない、極真精神を持った人物を作り上げていくに違いないのです。

そこで初めて、創始者大山倍達の偉業が一人一人の弟子に伝達されたことになるのです。ここに、極真精神の価値があり、本当の極真会館の建設があるのであるのです。このことが、創始者大山倍達の要求であり、願いだったのです。

そのような結果をもたらすべきであったのにもかかわらず、考えられない分裂騒動が展開してしまったのです。我々極真会館の苦痛が始まり、同じ弟子たちが、派閥を作るなどすることが、まかり通るようになってしまったのでした。まさに、本来の理想から離れた極真会館であるといつてよいのです。

このような状況を見つめる天国の創始者大山倍達の悲しみはいかばかりか計り知れない

ものがあるのです。世間の人たちにまで、不信を抱かせる状態になっていることは間違いないのです。この状態とともに、今この状態を繰り返しているのです。このような、極真会館を放り投げていいわけではないのです。再び大いなる本然の意義を立てていかなければならないのです。

この極真の道において、創始者大山倍達と弟子たちの曲折はぶつかっていることを我々は知っているのです。このような、さまよう極真会館をそのままにしてよいはずはなく、これを見つめる創始者大山倍達は、その意図をしっかりと立てているところを保護するために立ち上がるのです。この団体が極真会館手塚グループなのです。

第三節

極真空手の指針

—

人権と環境

指導者が、心がけなければならないのは、人権と環境を蹂躪してはいけないということなのです。武道を志すものは、人権と環境の公的なすべてに関して蹂躪してはならないという思想を徹頭徹尾持たなければならないのです。森羅万象のすべてに関して大切にす心、家族を大切にす心、民族、国家は勿論、世界人類を大切にすという心を持たなければならないのです。

そうでなければ、極真空手の目指す理想は実現しないのです。極真空手を通じて、多くの関わりある人々と環境を大切にすということなのです。私たちは、人にも環境にも優しい心を育てなければ指導者としての誇りは持てないのです。乱れた世の中であればあるほど、人権と環境を尊重し重要視することができなければ、ただの暴力を学んでいるのとなんら変わらないのです。

私たちが暮らしている家庭が大切であり、食している食物が大切であり、着ている着物が大切であり、私たちが携えている生活の基本も勿論大切であるという認識が必要なのです。特に空手は、心身を育てるわけであるから、私の肉体も大切にしなければならないのは言うまでもないのです。このような立場で私達の一身を通してお互い尊重しながら生活をするを願うのが武道家として道になるのです。ゆえに尊重する心を度外視して対処してしまえば、良き結果は生まれません。

ところで、道場において先輩であるといって、後輩を大切にしない風潮が生まれるとしたらそれこそ残念なことにはならないのです。自己中心的な気持ちで後輩に接するとき、後輩は傷つき、このことで道場に足を運ばなくなるのです。後輩に責任を持つということは、大きな心、広い心を先輩として道場生を育てていくことに他ならないのです。さらに、先輩として人の道に外れるとしたならば、極真空手をやる資格はないのです。青少年の健全な育成のために先頭に立たなければならない先輩としての指導者がいい加減な気持ちで生活してはならないのです。

しかるに、武道家は、誤った人々を大きな心でもって指導できる人間像を目指すと共に、自己研鑽に、磨きをかけていくべきなのです。このような立場に立つとき、極真空手を通して、精神の共有、技の共有がなされ、大いなる偉業が道場を通して築き上げることができるのです。初めてここに道場としての面目を立て得るのです。私達が心に留めておかなければならないことは、人権と環境を決して蹂躪することなく、一生かけて空手道を全うすることなのです。

二

稽古

極真空手は、大山倍達の強さ、技、行動力、人間性を追体験することによって、初めて体現されるのです。大山倍達の空手の強さ見せられて池袋の本部道場での稽古を続けてきたのでした。私たちは、稽古の中で大山倍達の稽古を見せられそれを刺激として感動を与えられたのです。大山倍達の偉大さは何かといえば極真空手を実体でもって実際見せてくれた指導者であるからなのです。それゆえ、私たちは、空手の道を教えられ、それを受け継ぎ、空手の精神を継承しようとしたのでした。それゆえ、極真空手を稽古するということは、大山倍達のような実体を築き上げることであり、それを基礎としてより発展させることになったのです。極真空手を稽古せずしてその精神を受け継ぐこともできないし、ましてや刺激も感動もないのです。

極真空手は稽古で持って私たちが結びつけるのです。さらには大山倍達の技と、人格を共有することになるのです。極真空手が稽古を持って関係を結ぶ時、大山総裁を基盤としたより発展的な理想を備えた人格者へと上り詰めていくことができるのです。ゆえに、極真空手は稽古を必要とするのです。概念だけではだめなのです。今、自分は何をやっているのか、現実に稽古をしているのかということになるのです。

極真空手の意味合いは、大山倍達という標準モデルを持っていることなのです。標準的形、原型としての形があり、その上での私たちは、人格的実体として一般の多くの人に稽古を通じて刺激と感動を与えていくようになるのです。

三

貴重な極真空手

私たちは、極真空手を生涯の武道の道として修練してきたのですが私にとっての極真空手であって、世間一般では、たかが空手という一分野ということになってしまうのです。しかし、私たちにとって、されど極真空手なのです。

ところで、意味合いで言うならば、極空手は空気と同じと思えるのです。空気が通っているのに普段意識してそれを感じられないのです。ちょうど全速力で走った人が激しい呼吸で空気を求めていく姿は、空気がなければ私たちは生きていくことができないと思えるほどなのです。空気は絶対に生命に必要な要素に思えるのです。極真空手は実際に体験し

ないと分からないのです。順序良く実践してみて必要性を身体で感じる事ができるのです。

さらに極真空手は体験の中で自分自身に浸透してくるのです。赤ん坊がお腹の中でお乳を飲む方法を習って生まれてくるのではなく、母の目の前のお乳を吸うのです。また、私たちが季節の中で寒ければ寒いということを知って感じるのではなく感じて知るようになるのです。

それと同じように、極真空手の本質は自動的に稽古の中で理解するようになるのです。まさにそれは、知って認識するのが原則ではなく認識してから知るのです。極真空手の本質は、稽古で感じる量・質そのものが、その人の極真空手の本質になるのです。

稽古は、私の五官の全てから入って心臓の中を突き抜けます。そして、私の心の中にまで入って住もうとするのです。既に私にとって一番貴重なものになってしまいます。この本質は、いつも持ち歩きたいと思うし、その道から離れたくないと思える程、極真空手の稽古を最高の宝物であると感じられるのです。私たちは、極真空手を収める倉庫を見つけているのです。その倉庫は言わずとも私の心なのです。だからいつも私は極真空手の稽古を重要視することができるのです。

四

社会的認知

今の社会において極真空手が願われることは一体何でしょうか。空手道において質が向上することに他ならないのです。そこで、極真空手において、社会的認知が絶対的に必要であることはいままでのないのです。そのためには、極真の道場生一人一人が自覚を持って最良の人生を模索することが大前提なのです。

社会的認知とは、具体的な例を挙げるとするならば、オリンピックの競技になることであり、学校教育に役立つことであり、国や地方公共団体に影響を与える事なのです。社会的認知の上に武道として歩みだすとき極真空手は、将来に大きな夢と挑戦が広がってくるのです。

ところで、創始者大山総裁は一体何ゆえに極真空手を持って社会的認知をされたのでしょうか。大山総裁は、他国から一人日本という環境の中に身を任せ、苦勞しながら試練の途上の中においても極真空手に対しての一念だけは絶対的なものとして戦い抜いた人生であったのです。今までの歴史的環境、あるいは事情の環境があったでしょうが、そこから世界に出発したのです。全然知らない異郷の地、そこには数多い艱難が待っていることは大山総裁自体が知っていたのです。

そして、大山総裁の極真空手に対する情熱は本当に極真空手を愛する心、最強であると信じる心があったから社会的認知をもたらしたのです。総裁自体、いつでも極真空手を断念ことはできたのは当然なのです。

しかしながら、最後まで突き貫いて極真空手を実践した大山総裁であればこそ、その情

熱が社会的認知をもたらせた唯一の決定的要因であったことは間違いないのです。極真空手を世に広めるとき、他のあらゆる団体からの反対があったのです。情熱や決心といったものは、その反対を乗り越えていくに有り余るものがあったに他ならないのです。

極真空手は世界的規模で膨張したのです。その中で大山総裁が願う社会的地位の確立は、組織の整理でもなければ、会員生制度でもないのです。どんな大きな組織でも利益を追求すればいつかは終焉がやってくるのです。極真会館が小さかったとき、大山総裁が存在しこの組織を起こしていったのです。そこには極真空手に対する情熱に満ち溢れていたのです。

私達が原点に戻らなければならない事は、一人一人が大山総裁モデルを追及することなのです。正しい舵取りができるリーダーを望むべきなのですが難しい話です。私たちには大山総裁という模範的先生がいるのです。その意味では、極真空手は組織力で持って社会的認知を受けるのではないのです。まさに大山総裁の志を受け継いでその生き様を体現して、社会的認知を受けるのです。

五 指導の本質

極真空手の道場は、大山倍達の主張する実践空手を推進しているのです。今まで伝統派空手の道場は寸止めのルールに則ってスポーツ化してきたのです。当然フルコンタクトの実践空手も極真会館を基盤として競技しているのです。直接打撃制も寸止めルールも空手の一部を把握して今まで主張してきたのです。私は、その空手の全貌を正しく把握してこそ無数に分かれている空手の派閥を理解しえるのではないかと思うのです。

空手界は問題が多く山積しているのは間違いないのです。それがオリンピックに参加できない状態も生み出しています。これから極真空手道場として何を中心として運営していったらいいのかと模索する日々が続くのです。

私は、これから空手道場の運営者として、何が良いとか悪いとかという審判主としての立場ではなく、善悪を超越した最良の方向を目指すべきではないかと思うのです。指導者の排他的な根本原因は空手の概念の本体論の曖昧さにあると思えるのです。各道場の指導者は、自分の考え方が絶対でありそれ以外は認めない流れを作っています。

結局、道場ごとに絶対者のような人が存在し、絶対者が多数いて纏まりがつかなくなっているのです。私はこれらの現状に対して提言するのです。空手指導者を例えて言うならば春夏秋冬に表すことができると考えます。春の力として花を咲かせる環境を持つ指導者、夏の力として生い茂らせることができる指導者、秋の力として実りを結実させることができる指導者、冬の力として全てを枯らし、次に準備しようとする指導者、各々が主張すればお互い打ち消しあう存在になってしまうのですが、春夏秋冬が太陽を中心として回って行けば、お互いが必要になってくるのです。ゆえに、混乱を收拾し得る道場指導者としては、認め合い、調和協力することができる体制をいかに築き上げていくかが課題になると

思うのです。その意味合いにおいては、家族・ファミリーが道場の本体論の中心に据えていくとするならば、道場は発展するのです。強いては空手界全体が良き方向に向かっていくことができると考えるのです。

六

直接打撃制

私達は、創始者大山倍達がドラスチックに空手界に波紋を投げかけたことを実感しているのです。極真における直接打撃制は誰が認めなくとも、多くの空手の流派の間でその理想を受け入れているのです。また、世界中の人々は極真空手の実践スタイルを支持しているのです。

直接打撃制は、選手においても、当然必要ですが、子供たちから壮年に至るまで、極真空手にとって無くてはならない真剣勝負の方向性であるということは事実なのです。まさに極真空手は直接打撃を世の中に問うたのです。それを願った創始者大山倍達の生き方や、生活の基本は、まさに直接打撃制に原点があったのです。

創始者大山倍達率いる極真空手直接打撃の理想は、私達の理想であり、その理想は今の時代だけ果たされる理想ではなく、歴史を超越し、時代を超越しこれからも成し遂げられていく絶対的な理想なのです。ここに真実があるから武道であり、武道に生きる意味があるのです。

このような極真における直撃打撃の理想があるのだけれど、果たしてその理想を私達は、実践しているのであろうかと考えさせられるのです。創始者大山総裁の理想とは別の方向が今極真会館にあるのです。極真空手が一般大衆化している中で、創始者大山総裁に叛く方向になっているのです。ある意味で、指導者たる私達は、大山総裁と異にする歩みをしているのです。それは、指導者が純然たる武士道としての心構えで指導にあたっていないということです。

つまり、直接打撃の精神から崩れているのです。直接打撃とはまさに、自分に厳しく怠惰な自己との衝突であり惰性を排斥しなければならない戦い方なのです。もともと極真空手において直接打撃が自分を鍛えたのです。私が、大山総裁にお会いし、その表現された武道に接したとき、今の自分を否定して戦いの場に臨んだのです。その原点に立ち返って創始者大山総裁に従った自分を省み、生活の原点を直接打撃へと理想化すべきなのです。その意味は、直接打撃とは、人にやさしく、自分に厳しくするということなのです。

七

自己練磨

極真空手は、稽古をもって始まり稽古で終わる修行の自己練磨の場所なのです。この極真の稽古に参席した私達は、汗と涙を流す稽古に在籍したことになるのです。この場所は、止めることのできない汗を流す場所になるのです。

ここに私達は何で持って取り組むべきでしょうか。私達の心身のすべてであり、外的に身体を動かすことではないのです。自己管理であろうが、選手を目指すことであろうが、魂のすべてを投入することになるのです。稽古に臨むということは、喜怒哀楽は勿論、勝負の悔しさであり、心の奥深くあるすべてを確認することができる気持ちを用意することなのです。

稽古で流す汗は、お金に換える事ができない無限の価値を生み出すのです。このような心が稽古の中でにじみ出るとき、初めて極真の精神に触れることができるのです。

では道場とは何かというと、極真精神を厳粛に相続することができる場所ということになるのです。私達が極真精神を相続し、私達自体にこの精神が留まる事によって稽古をしたという実感が生まれるのです。この感性を持って稽古に参加した資格者になり得るのです。これを再三心に留めておかなければならないのです。このようにして初めて稽古の中で、すがすがしい感動が私達にもたらされるのです。苦しみの中であったとしても、稽古が終わった後に、すがすがしい感動が用意されていることを私達は忘れてはいけません。

その中であって、新しく私達が何か違った気持ちを得るのです。それは、良き自分の姿を見ることになり、自己発見の第一歩が始まることになるのです。

極真空手は、道場生と一つになって稽古をするのです。指導員の下、準備体操から、基本稽古、移動稽古、そして組み手に至るまで、全体がまとまるのです。ボクシングの個人を中心とした練習とはだいぶ様子が違うのです。これは、空手の独特のスタイルですが、道場生一人一人の無限の能力を全体が一つになることによって発揮することにつながるのです。稽古での臨場感を高め、我ならぬ我を追求することになるのです。稽古で思いっきり汗を流すこととなります。

これは私たちが自然に体験することであり、全体が一つになって、指導員の気合の下、不思議な力が湧き上がるのです。決して一人では生まれぬ力が溢れるのです。このような稽古の方法は、極真の伝統として先輩たちから指導を受けてきたのです。その頂点に、創始者大山総裁が顕現していたこととなります。

私は稽古の中で、創始者大山総裁がなされていることを再現しようと努力するのです。ここに再現した稽古は、自分を育ててくれた青春時代の汗がにじんでくるのです。有難いことに、この稽古が自分に快く染みついているのです。稽古の伝統とはありがたいことでもあります。今まで稽古してきたすべての内容を自分が具備しただけで、今まで創始者大山総裁との絆が深く結ばれてくる思いがするのです。

しかし、稽古における理想は、勝負に勝つことであり、己に勝つことを意味するのです。弱い自分の姿が稽古の最中に現れるのです。そんな自分との戦いが曲折する稽古の中で行き来するのです。弱い自己の運命を完結すべく勝負を挑むのです。再び本来の自分に遭遇することになるのです。全体で練習しながら、このような練習を経て、稽古で新たな自分を発見するのです。これは、いろいろな派閥に分かれていても変わらない極真の伝統なの

です。いや、他流派といわれる多くの空手道場にも取り入れられているのです。指導者が変わろうと時代が変わろうと自分にとっての極真の稽古は続くのです。

今日極真空手を中心として見るとき、分裂しているようではあるが、過渡的状況にあると定義したいのです。というのも、これからの勝負で次の勝利が待ち受けているのであります。私たちがあらゆる切磋琢磨をするときに、極真の伝統は変わらないと宣言できるし、稽古の伝統はいまや、若者を駆り立てる何かを持っていると言って過言ではないのです。稽古を通して若者にいかに多くの恵沢を与えることができるかなのです。それを考えると勝負偏重主義をとる極真空手は一人一人の胸深くに連結されていくことに気がつくのであります。

第三章 道場訓と手塚グループ

序

道場訓は、作家の吉川英二が大山総裁に極真会館のために送ってくれた指針です。極真の精神に則って修行していく上で欠かせない道場の人生指標なのです。そこで、その価値と意義に関して説明していこうと思います。道場訓は「道場生の誓い」なのです。極真会館入門における個人が基本単位として、実践すべき基本的理念なのです。

私たちは、道場に入門、空手着に身を包んだ時から、道場生が個人の惰性或今までの悪しき習慣性の仮面を脱ぎ、空手道を求める求道者として出発するのです。極真空手を続けていく限り、唱える道場生としての表題なのです。個人として極真会館で修行して、その精神を手塚グループが主張する「家庭」を守っていくための基本事項であると思うべきです。

その意味では、「道場訓」は、道場生が絶対レベルとして目標としなければならない設定なのです。道場生として、道を極めて行く上で、必然的な精神を散りばめた言葉なのです。ある意味で、修行者としての憲法なのです。

したがって、「道場訓」を唱和する場合には、何よりもまず道場生の身心を一致し、精神を統一させ、一心、一体、一念、一和の境地まで辿り着かなければならないのです。「道場訓」は、自分の良心に従い、屈服していく最低限度の人格基準が前提とならなければならないのです。それが、人々が認める尊敬される人格ということなのです。

このように、極真会館全体を指導する個人としての位置に立てるように努力するのです。その個人は、極真の伝統を背負っていく、地上最強、最高の方向性とし、極めて複雑な現実を背負っていくのです。ある意味で、極真魂を獲得する「道標」ということになるのです。

この「道場訓」は、人生の勝利者として連勝記録を樹立しようとするのです。人生の骨として、心臓として中心に据えて、人生を正しく極真魂と連結させる橋なのです。さらに

言うならば、「道場訓」のエネルギー源で、武道を愛し続けて行くことになるのです。世の中のどのような力や勢力とも比較にならない権勢として現れるのです。誰も「道場訓」に従っていく人生を妨げる事が出来ないのです。

第一節

「我々は心身を錬磨し確固不拔の神技を極めること」

心身を錬磨するということは、個人がしっかりするというのです。それは、道場生が極めなければならないのです。自らが築かなければならないのです。人と和して環境と調和するようになるのです。何故、「錬磨」という言葉を使ったのでしょうか。道場生は、心身を磨かなければならないのです。ただそのままで成せるのではないのです。磨いて自分を180度変えなければならないのです。昔から言われている「鉄は熱いうちに打て」とか、「苦勞は若い時に買ってでもしなさい」という理由はそこにあるのです。

これが道場生として最初の誓いであり、出発なのです。道場訓は厳粛なのです。怠惰になって引っ掛かってはならないのです。道場で稽古鍛錬し、しっかりとした意識を持たなければならないのです。全ては、手塚グループとしての共同責任となるのです。

さらに、「神技」を極めるという事はどのような事なのかを検討しなければならないのです。「神がかり」の内容を極めるということではなく、技術的に優れるのは当然のことながら、道場生として誰からも認められる人格を築きあげるといふ事なのです。「万物の靈長」と言われる人間が、良き人格を創造して素晴らしい人間を目指すのです。それ自体が「神技」なのです。

ところで、「神技」というと神がかりのような表現なのですが、実は自然現象そのままと考えていいのです。正しい循環運動であり、永続する自然の季節と同じなのです。必要不可分の内容なのです。個人ではなく、世界という次元で考えみましょう。今先進国と発展途上国とがあるのです。先進国は、物質的にも豊かで、余っていて捨てている現状です。しかし、発展途上国はすべての物が不足しているのです。それゆえ、飢えて死んでいっています。一年に二千万人以上の人が餓死しているのです。これが地球上のことなのです。地球規模での「神技」というレベルとはかけ離れていると言うことは一目瞭然です。

さらに、世界の自然な運動形態を破壊しているのが先進諸国になるのです。このままでは、どうしようもないのです。それゆえ、「神技」なる神業的システムが世界にとって必要なのです。自然の調整です。誰もが住みよい環境が築かれるということが「神技」であることはまちがいないでしょう。

第二節

「我々は武の神髓を極め機に発し感に敏なること」

ここで言う武とは極真空手道であります。武道とは人間としてのすべての人間力を高め

る為に命がけで望まなければならない修練です。常にその限界を目指し、身心を奮い立たせるのです。さらに、自分の心と環境の動きに対してすばやく反応することが出来なければならないのです。

道場生としての武の神髄とは、大山総裁の手本としますから、師が歩んだ極致なのです。道場生は、修行を白帯から始めます。無になって大山総裁を追いかけるのです。有段者になり、さらに師を追い求めていく、努力がこの二番目の道場訓に秘められているのです。

地上最強を実践した極真会館を受け入れ、自らが修行の原点に立っていこうとするときに、絶えず意識する内容なのです。武の神髄は、私たちにとって見本とする大山総裁の連戦連勝神話に散りばめられているのです。この師を標準として、毎日のように努力しなければならないのです。これは観念的な内容ではないのです。また「機に発し感に敏なる」ということは、実際の環境問題に素早く対応しなさいということなのです。修行を行う事は、目前の問題なのです。

極真空手で学ぶ武道とは、人間としての全ての人格の総合力を高めることであり、命がけで望まなければならない修行です。常に大山総裁が到達した極限を目指し、心の中を奮い立たせ、自分の心と周りの環境の動きに対してすばやく反応することが出来なければならないということにもなるのです。

これらのことは、自然現象にも当てはまるのです。空気と言うならば、低気圧圏に空気が薄くなれば、高気圧圏から空気が流れ出て満たしてくれるようなことであり、水は、高いところにあるとき、下に窪みがあるならば、自動的に流れて埋め尽くしてくれるのです。要するに「バランス」を言っているのです。

世の中は、あまりにも「武の神髄」とかけ離れているのです。その良い例がエイズ問題に象徴される性の乱れと麻薬の乱用ということにもなります。人間の狂乱の世界で天罰が下ることにもなるのです。ですから、心身を「武の神髄」に向けて訓練しなければならないのです。

付け加えるならば、世の中では良心を騙しながら、体の言うとおりにあらゆる詐欺、謀略、中傷をして、お金を集めたりする人がいます。このようにしてお金を集めたならば、かえってお金その人を打つのです。審判の棍棒となるのです。

第三節

「我々は質実剛健を持って克己の精神を涵養すること」

肉体を強く逞しく、常につつましやかな素直な気持ちと、自らの欲望や邪念を抑制できるような精神を育てなければならないのです。この内容は、将来において家族を形成していくうえでとても重要なのです。武道は家族や地域社会を守ることに原点を置いているのです。

そこで、主体的精神を忘れない生活、心の世界を忘れない生活をするならば、どんなに体を鍛えても構わないということなのです。今まで体を鍛えると言うことが、健康増進と

いうよりは、肉体を持て余し、酒や煙草に癒しを求め、いかがわしい店に出入する事という構図に成っていたのです。また、そのことが英雄視されるような間違った観念があったのです。昔で言えば吉原で遊んだり、現代ではソープランドで性を弄んだり、その環境がまるで公認されるごとくまでなっているのです。その環境に修業をする道場生として、陥っては空手修行の意味はなくなります。質実剛健がセクシャルアニマルとなつては武道も修行もあつたものではないのです。

今からは心が体を涵養する人生を営まなければならない時だと言うのです。家庭を守るということは妻との愛情関係を大切にしなさいということなのです。まだ独身であれば、新妻を迎える清き魂を備えるべきなのです。何人とも関係をもって乱れた人を夫に迎えようとする女性が本性的にいますでしょうか。本来ならばどんな男女も容認しないはずです。

私たちの生活の毎日が心を主体としているという観念を持って生きなければならないのです。日常生活が、心に関して体が完成形態を整え、心の感性基盤を形成しなさいと言うのです。直接的関係なのです。その直接的関係が、毎日、一年、一生を通じて関係を結んでこそ、自分の居住地となるし「家庭」になるのです。

言い換えれば、道場生は、毎日、心と体の統一を図り、前進的に発展させていくのです。停止してはいけないのです。停止すればすぐに落ちてしまうのです。寝てばかりいて怠けて、食べて楽しむことだけでは、容認されないということなのです。実に忙しいのです。一生は短いのです。休まず走るべきです。

第四節

「我々は礼節を重んじ長上を敬し粗暴の振舞いを慎むこと」

極真の精神は、常に礼儀正しく節度のある行動がとれるように心がけなければならないのです。特に親や目上の人を敬い、考えのない乱暴な態度や言動及び行動はしてはいけないのです。自然の法則を根拠として極真空手道は価値観をしっかり定めているのです。これは、手塚グループの根本思想である「自然」という考え方に立脚する内容なのです。その土台の上に「対話」がなされていくのです。当然原点は「家族」です。

人間社会は、その人においてのみならず、他の人との間に地球と月のような関係性を結ぶことによって存在し、発展するものと見ることができるのです。従って、一人ひとりが、孤立して存在できるものではないのです。月であれば、太陽の輝きの反射によって、三日月になったり半月になったり様々な輝きを放ちます。

どんな人間関係でも、各々主体対象は必ず共通の目的を中心とするようになるのです。月のように地球を中心に関係を持つことができるようになるのです。その意味では、会長手塚を中心として道場生は運行されているのであり、道場生の存在も決定されるのです。

当然会長手塚と道場生の相対関係が成立によって道場も一定の秩序体系をなしているのです。そこには縦と横の秩序があります。そしてそのような秩序体系の中では各個人は一定の立場と成長するのです。

会長手塚と道場生は、主体と対象は調和のある「対話」をおこなっており、そこには発展がみられるのです。さらに、宇宙のすべての個体は天体から原子、素粒子に至るまで、あるいは人間から単細胞生物に至るまで、誰も真似できない個性を持っているのです。しかし、個性を持ちながら同時に全体との関係をもって存在しているのです。

人間に関して考えても一人一人アイデンティティを持ちながら、他人と関係を持っているのです。その関係性でも自己同一性は失われることはないのです。つまり個性は生きるのです。そして各々人間性が発展していくのです。自然界の法則が人間社会の法則に合致するのです。人間社会は、対象が主体の意志に従って行動するという意味での循環運動が行われています。例を挙げるとするならば、夫婦間は、子孫繁栄のため、次代の繁殖をしながら螺旋形の運動を行っていくのです。つまり、後孫は続くのです。

一

礼節における縦の価値観

【父母の価値観＝慈愛 子女の価値観＝孝】 【師＝師道 弟子＝敬服】

【年長者＝愛護 年少者＝尊敬】 【上官＝命令 部下＝服従】

二

礼節における横の価値観

【夫婦愛＝和愛】 【兄弟愛＝友愛】 【同僚、隣人、同胞、社会、人類＝和解、寛容、義理、信義、礼儀、謙讓、共助、奉仕】

三

礼節にみる個人的価値観

【純粹、正直、節制、勇氣、智恵、克己、忍耐、自立、自助、自主、公正、勤勉、清廉】

第五節

「我々は神仏を尊び謙讓の美德を忘れざること」

神仏を尊ぶということは、神仏と共にある人格を目指す事なのです。神仏を尊べば当然神仏が共にあって天運がついてくるのであり、天運を動かす人物として顕現でき周辺に連結させるということなのです。天運を、謙虚になって周辺に連結させて初めて極真魂が生きるのです。

言い換えれば、自分たちが神仏を尊ぶということは、神仏のような心を抱いて、極真空手で培ってきた「心技体」を道場生に平等に分けて上げることができる原点となるという事です。ある意味で神仏の代身のごとく、自ら培ってきた良き内容を惜しげもなく、みな等しく皆さんにあげるのです。それは、美德として当然映っていくことなのです。

ところで、空手道とは、ある意味で戦い方を学ぶのです。もし背後に神仏がなければ、只の暴力を学ぶことに等しく、無頼漢を作ってしまうだけなのです。体を持って余す不良グループを育成しよう等とは考えもしないことです。世間は、ジグザグに上がったたり下がったり込み入った人間関係で苦慮しています。良き伝統と文化が生まれにくいのです。それゆえに私たちが、神仏という背景を持っている事は、ありがたいのです。

どのような事があっても、本来の武道を心がけ、神仏を汚すことはしてはいけないということなのです。神仏を汚すことは、すなわち自分自身を汚すことになるのです。極真魂というひとつの精神文化を完成するというと事になるのです。よく母親にお天道様いつも見ているから、悪いことをしては駄目だよと言われたものです。

さらに、自分達が生きていけるのは、あくまで我々のご先祖様が時代と共に築き上げてくれた最も大きな財産であり、先祖を大切に思う気持ちを忘れてはいけないのです。私が生まれてきた背景を少し考えると、私の両親がいて、10代遡ってみると、私が生まれるために、両親そして祖父母と実に1000人の人が関わっているのです。当然20代遡ることも考えました。そうすると百万人の人が関わっているのです。先祖の一瞬のズレが私を誕生させない事になるのです。

奇跡で生まれてきた私たちであることを忘れることなく、生まれてきたからには特別な役割があると確信しながら極真の道を全うしたいものです。

第六節

「我々は知性と体力とを向上させ事に臨んで過たざること」

極真精神を持った人物としての方向性を指すのですが、個人として心と体を成長させることが大前提になります。どのようにして知性と体力を向上していくかと言うならば、極真空手道を継続時に、「信念」と「押忍」と「指導力」が無くてはならない要素なので、フル活用するのです。この三要素が極真空手を身につけていく上での必要なのです。このことは、道場生だけではなく、指導者にとっても必要になってくるのです。

新しく極真空手を学ぶ上で最初の「信念」は、自分が空手道を通じて自己創造していくうえで絶対必要な事なのです。憧れて極真会館の門を叩いたのです。大山総裁の弟子として、その全てを相続していくという「信念」なしでは話にならないのです。当然手塚グループにおいては、師範や先輩の空手道に対する内容を吸収するのです。

「信念」ということは、憧れた空手道に対しての基準をしっかり持つということなのです。初めて学ぶとき、自分自身が無い状態で稽古に入ります。何もかもが新鮮です。すなわち、完全にゼロなのです。完全に無の境地に立つのです。無になっているので、自動的に道場のすべてを与えられるので、循環運動のように空手道の伝統が道場生の身心を回り始めます。ここに知性と体力の向上の第一歩が始まるのです。

そこで、一道場生として一生懸命投入するのです。完全投入していくので、あらゆるものが身についてくるのです。したがって、自己主張などできるはずがないのです。自分がありすぎると、師範、先輩の内容を吸収しにくくなるのです。

その次に必要な資質が、「押忍」ということになります。道場生の五官すべてが、空手道に同化していくことを心がけるのです。師範や先輩の指導を受けるわけですから、貪欲に一つも漏らすことのない気持ちで、一致しようとするのです。この業を成し遂げるには、「押忍」の精神しかないのです。

このような気持ちを継続すると言うことで、師範も先輩も心に留めて協力して行こうとする心が増し加わるのです。つまり指導者から道場生に極真空手の伝統がすべて継承されていくのです。「指導力」はこうして生まれてくるのです。師範と先輩の「指導力」の成長のためにも道場生の「信念」と「押忍」の精神は絶対に必要になるのです。

第七節

「我々は生涯の修行を空手の道に通じ極真の道を全うすること」

私たちの道場訓は、極真空手の根であり、生命の根であり、伝統の根であり、修行生活の根なのです。道場訓は、一心、一体、一念、一和の修行生活をする「道標」なのです。このように、空手道追求に自分自身の置くことによって、身心一体の完成を目指すものは、空手道の極致に到達した大山総裁の弟子になることができます。言い換えれば、極真の道を全うすることによって、大山総裁が切り開いた無限の価値を相続することができ完成させる道を切り開くのです。理想の人間性を完成させようとするものなのです。

極真空手で修行し武道を学ぶのですから、強くならなくてはいけないということが前提にあるのです。強さとはすなわち力であり、その力とは精神力・体力・知力など全ての人間力を総合しての力を持つ努力をします。人間誰も100%パーフェクトな人間はいないのです。しかし、極真空手を学ぶ以上、たとえ、生涯過ごしたとしても、常に100%に近づけるように努力を続けるのです。何も極真の道場にいるときだけが修行ではなく、日常生活そのものに、影響を与え、生涯続けることができるようにしなければならないのです。

極真空手でただ空手術を学んでいるだけの気持ちでは、私たちは、ただ武術を習いに来ているだけであり、真の極真空手の教えを学びに来ているのではないのです。極真空手で本当の人生を学ぶのです。極真は、どんな立場にあったとしても、その極真精神は永遠に続くものでなければならないのです。

第四章 極真空手の心の教育

はじめに

これからの時代は、より心の教育が重視されてくるのです。急速に変化する社会状況の中で子供たちをいかに育てるか不安な時代が到来したことは間違いないのです。核家族が見直され、大家族へと移行しているようにも見受けられるのです。子育ての理想もどこにあるのかと模索する中、極真会館は、子供達の心の教育に立ちあがっているのです。心身の発達に空手は限りなく良き環境と体験を与える事実を確認していきたいのです。

少年時代の心の教育は、家族における触れ合いと愛情体験によって築かれていくのです。子供の教育は人と人のかかわり合いの中で育っていきます。最近の研究で人間形成の基礎も幼児期に形成され、その教育の重要性も十分に認識されるようになってきたのです。

ところで、家庭で得られるはずの愛情や暖かい触れ合いが、母親の育児ノイローゼ、夫婦の不和、地域社会との孤立等、幼児の心に空洞を作ってしまう傾向にあるのです。今心の教育はどのようにしなければならないかを、明確に表現しなければならない時期にきているのです。そこで、家族と道場環境ということテーマに絞って検討することにしました。

第一節 中央教育審議会

かつて、神戸市の中学生による児童殺傷事件に端を発して、小杉隆文部大臣から「幼児期からの心の教育の在り方」について中央教育審議会に、諮問があったのです。諮問にあたり、「生きる力の基礎というべき、生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理感や正義感、美しいものや自然に感動する心等豊かな人間性の教育を目指し、心の教育の充実を図っていくことが、極めて重要な課題である」ということを指摘していました。

そこで、審議会は「論点整理メモ」をまとめたのです。①安心感、安全感、信頼感、確実感を子供たちに根づかせることが大切であり、幼児不安が大きいとこれらが十分根付かないという結論です。②幼児期の発達段階としては、物事に自信を持って係わられる、してよいこと、よくないことを理解するようにするのです。自分の気持ちを必要に応じて、主張したり抑制したりし、親から離れて遊べるといったことまで成長させるということです。③善悪の区別やルール等に関する道徳性の芽生えを、より適切なものに発達させることが重要ということです。④豊かな生活体験を通じて、自我の形成を図り、「生きる力」の基礎を養うことが重要ということであったのです。

次に、答申の中から「心の教育」に関する部分を取り上げてみます。まず家庭の在り方を問い直そうと提言し、思いある円満な明るい家庭を作ろうということです。夫婦間で一致して子育てをしましょう。会話を増やし、家族の絆を深めましょう。過干渉をやめ、父親の影響力を大切にしようと呼びかけていきましょう。

また、悪いことは悪いとしっかりしつけましょう。責任感、自立心、思いやり、ルール

を守ることの大切さを身につけようと、家庭教育の必要性を提言しているのが特色といえるのです。

円満な明るい家庭を作るために、両親が協力して子育てをすることを重視するのです。特にしつけのあり方で、やってはいけないことや間違っただけは、しっかり正そうとするのです。自分の行いには責任があるということを気づかせよう等が強調され、父親の存在、役割を前面に出しているのです。

また、思いやりのある子ども像を目指して、祖父母を大切にす親の姿を見せることを意識するのです。手助けの必要な人を思いやれるようにしようと呼びかけ、生と死、特に命の大切さや、すべての人を尊敬する必要性を求めているのです。

さらに、幼児には親が本を読んで聞かせようと提言し、添い寝をしながら本を読んであげることは、心の成長に大きな効果があるとすすめているのです。

このような提言は、人間としての生き方や、将来の夢と希望に耳を傾け、子供の良いところをほめて伸ばすことは大切なのです。そればかりでなく、生活のルールや家事手伝いをして責任感、自立心を育てることも、人としての生き方を形成するのです。その場合親の規範、親自身の姿が大きく影響すると示唆しているのです。

また、遊びの重要性を再認識し、心の成長を歪める、知育に偏った早期教育も考え直そうと提言しているのです。

子供たちのよりよい成長を目指して、どのような点に取り組んでいくかを具体的な期待感を持った言葉で表現しているのです。家庭と連帯して、道徳性の芽生えを培うために、人として行けないことに気づかせ、善悪の判断の適切なかかわり、親に対しては施設内で、子供が発生させるサインを伝え、しつけが欠けている場合には、親に働きかけることを要望しているのです。

また施設内で自由な子供の遊びを放任しないこと、人間形成基盤を培う幼児期に自然体験や社会体験などの体験活動を積極的に取り入れることを提言しているのです。最終答申の「心の教育」をどのように実践していくかをさらに検討すべきは私たちの役割なのです。

さらに、家庭との連帯を重視し、親同士が交流する子育てサークル活動支援、子育て公開講座、嘱託医との相談機能の充実、親の保育活動への参加、未就園児の体験入園の機会などを持つように求めているのです。また育児不安が一般化している現状を考えれば講和やカウンセリング、子育て支援活動の実施は避けられないということなのです。

これらのねらいは、「生きる力の基礎」となる、心情、意欲、態度というように明確に表現されていますが、「これらは生きる力の基礎」としての原点に値するのです。

「健康」という内容においては、心と体の健康は、しなやかな心と体の発達を促すことであり、幼児の自立心を育て、他の幼児と関わりながら、主体的な活動を展開する中で生活に必要な習慣を身につけることです。

「人間関係」の内容では、友達の良さに気づき一緒に活動する楽しさを味わうということです。良いことや悪いことがあることに気づき、考えながら行動できるようにするので

す。友達とかかわりあいを深め、思いやりを持つようになるのです。友達と楽しく生活する中で、決まりの大切さに気づき、守ろうとするのです。高齢者をはじめ地域社会の人々など自分の生活に関係深いいろいろな人々に親しみを持つようにするのです。このような内容に、信頼感、豊かな心情。相手を尊重する心などが付け加えられています。

「環境」では、生命の尊さに気づき、いたわって大切にすることであり、自然の大きさ、美しさ、不思議さに直接触れる体験を通して幼児の心安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然と関わりを深めることができるように工夫することとなっているのです。

第二節心の教育とは何か

「心」という言葉を辞書で調べると、「人間の知識、感情、意志などの総称。その働きのもとになっているもの。精神等」さまざまな表現がされていますが、人間が心と体からなっているということは否定できないのです。しかもこの心と体は表裏一体で切り離すことができないのです。つまり、心にあるものは体に現れ、体に現れたものは心に現れるということになるのです。この点に関しては、私の主張になりますが、「心」は人間が持っている「形」の要素である。つまり、「心」の形であり、体にも形として現れるのです。

さらに、付け加えて、「心」の機能的な部分としては、知情意の機能であります。知的機能は、感性があり、悟性、理性の能力を持っており、情的機能は、情感性を意味し、意的機能は意欲する能力、すなわち、意欲性を意味するのです。

つまり、人間の心は、個性として存在し、両親の愛情によって育てられ、成長して行くのです。特に幼児期の成長は、母親の愛情が重要であり、無意識のうちに体の成長とともに、心の成長が愛情によって育っていくのです。家庭の愛情によって幼児期の心の基盤が築かれていくのです。

心の教育は愛のまなざしで子供を見つめ、抱くことが、基盤となるのです。幼児が子供として発展するには、肌と肌との触れ合いが重要になってきます。子供は、泣いて母親から独立し、笑顔を求めて、家族と出会うのです。笑顔に出会った子供は、満足し、心の平和に満たされ、笑顔を返して、心の安定を図るのです。

心の教育は、子供を理解し、寛容することなのです。親の中には、子供を理解できないで悩む人が多いのです。理解する努力はまさに、親自身の課題であり、重要なテーマになります。どのぐらい、子供を人格体として、知っていくことができるかは、親自身の取り組むべき課題なのです。さらに、寛容になることは、心を理解し、思いに共感し、信頼し続けることになるのです。親が焦ってはいけません。親自身の成長はここに願われるといって過言でないのです。

子供の教育は人権をみとることから始まるのです。家族での心の教育は、親子の対話から始まります。過保護、過干渉は、対話なき世話好きから始まってしまっているのであって、子

供の願いや要求は何であるかを親が察知するには、子供の様子を十二分に観察し、さらに、良き対話を繰り返すのです。対話とその影響は、子供が無理なく両親の姿を直視し、行動、態度、表現を、子供はくまなく研究し、いつのまにか、似させて、親のようになろうと努力する過程が生まれてくるのです。

先に中央審議会の最終答申や幼稚園教育要領における心の教育に概観しましたが、その必要性を叫ばれた背景には、最初の自己形成の時期である幼児期から「生命の大切さ、人を思いやる気持ち、自己制御」などが不足していたとの指摘があったからなのです。

心の教育は、指導者が子供たちとの信頼関係を築くことから始まります。つまり、指導者はどんな子供であっても、一人一人のコミュニケーションを図らなければならないのです。子供たち一人ひとりを知って、やさしく子供たちに寄り添いながら、行動をとるのです。子供たちの立場を理解するところから始まるのです。その際、指導者の温かい寛容な気持ちと、安定して子どもたちを見守る姿勢が要求される事は間違いないことです。

心の教育は子供たちの「生きる力」を信頼し、丁寧に関わることであります。道場はまさに、「生きる力」の源泉になります。礼儀作法に見る人間関係の確立、稽古における、気合と、はっきりした身体の動き、元気な子供たちを育成していく環境なのです。この環境で本来子供たちが求めている、成長しようとする生命力を大いに助長するようになるのです。

道場では、組み手などがあって、挫折感、葛藤、摩擦なども生じますが、相手の痛みを知って思いやる心を育て、どんなことにも負けない、「しなやかな心」を築いていくことになるのです。つまり、雪の重みでしなる竹が、ある程度まで来ると、雪を跳ね飛ばしてしまうような、強い柔軟性を確立させるのであります。

心の教育に人間味あふれる日常の道場の教育実践の中にあるのです。この心の教育を目指すために、道場は、段階ごとの教育レベルを設け、空手着の帯の色で判別しているのです。道場での親切や思いやりを通じて、喜びや感謝の気持ちを味わい、道場生同士トラブルがあった時は、そのことによって、自らを反省する心を養うのです。トラブルの中から、自己制御や自己創造、また、道場のルールをより深く理解するようになるのです。このような環境で子供たち一人一人が、生命の尊さ、人間の素晴らしさを体験していくことは間違いないのです。このような体験は幼児期から、基礎となると考えるのです。

最近子供たちの取り巻く環境は、少子化、核家族、地域社会における人間関係の希薄さが懸念されているのです。心の教育は、愛情豊かな大人の人格体から子供は育て成長していくのです。子供たちの教育の原点は、家庭であります。さらに、家庭を取り巻く、道場や地域社会がいかに子供たちに愛情を注ぐことでもあります。

道場においては、指導者が子供たちに接する人間としての在り方を日々チェックして、自ら反省するところに重点が上げられます。道場での子供たちの触れ合いは、子供たちが一生を築く上での、生涯まで残る記憶を残してあげたいものです。これからは、地域ぐるみで、意識の向上や、協力がより求められるようになるのです。地域の人たちの多様な触

れ合いは、子供たちの豊かな心を築きあげ、平和な心の創造を果たすようになるのです。

子供たちは、両親に保護され、愛情をかけられていく過程で、豊かな愛情を取り込むことができるのです。さらに、調和のとれた健全な精神を築き上げることができるのです。子供たちは、愛とは一体何かを体の中で体得し、自己を知り、他人を愛することができるようになるのです。また時には、他人の痛みを自分の痛みとして感じるようになり、そこから助けを必要とする人たちに、思いやりを持つようになるのです。

人と人の触れ合いで行われる、心の教育は、子供の平和を愛する心を育てるのに重要であり、家庭における愛情の実践と、道場におけるきめ細かい指導によって育てられるものと確信するのです。

第三節 武道における教育

一 提案

これからの、主役であるべき子供たちを極真空手道を通して養成する問題が、緊急の課題として提起されるのです。特に、青少年問題が大きな問題になりつつあるのです。というのも、今日の混乱する社会で、子供たちが正しく育成されるためには、道場の指導者が、方向性を提示しなければならないということになります。手塚グループの場合、武道という道に長年の間、触れていたのです。武道精神が根底に流れているのです。

道場の指導者として師弟の道を崩壊させることなく、指導者としての威厳を失墜させてはならないのです。それは、手塚グループの環境が良かったので自分があると思えるのです。昨今の教育現場の現状としては、知識の売買場所となり、塾が乱立し、指導者は商人化に傾きつつあります。私の学生時代は、担任の先生を一番信じることができた時代でした。

武道における教育は、基本的には子供たちが親を喜ばせようとするところにあると指導します。すなわち、愛情関係が教育の原点であり、両親の人格に似せて、家庭を形成し、環境と人々を愛しながら、社会秩序を形成し、平和な愛情あふれた家庭を通じて生活することを願うのです。私の経験から、武道で要求される教育とは人間が家庭を維持し、幸福感を達成することに重点が置かれるのです。この教育こそ普遍妥当、恒久不変の教育の原点になるべきなのです。

二 人間性

武道における教育の原点は、自分自身を完成させることでもあります。このような、分かり切った内容に行きつくには、青春時代のすべてを投入したような気がします。全国をさまよい歩きながら、求めた末の結論でした。それゆえ、家庭を築くことに関しては慎重でした。さらに良き家庭を築くことの意識が強すぎるぐらい大切に思えたのでした。さらに、子女を生育する能力を養うこととなると、自分の能力をどのように向上させるかで、苦しかった青春ということになります。また環境を十分大切にし、活用できる能力を身につけ

るように努力したのであります。

はじめに人格の完全性が柱になります。それは、自分らしい自分の発見ということになります。自分の予約された人格像が本来あるべきと結論づけました。その人格を模索しながら切磋琢磨して自分のあるべき姿を探るのです。次に子供を育てるための、男女の円満な調和をなすことができる能力、すなわち、資格を身につけなければならないと思えたのです。当然男性と女性の内容ある調和を完全に備えなければならないのです。武道を志す者は、家庭内暴力などもってのほかになるのです。この観点はとても難しかったのです。安易に女性の声をかける自分でもないし、姉妹がいたわけでもないし、恋人を持ったわけでもないからなのです。それで、道場で女性の稽古生に話をすることで解決の糸口を見つけようと思いました。そうすることによって、気軽に女性の声をかけることができ、姉や妹のような関係で男女のなんたるかを研究したのです。

さらに環境問題に移るのです。環境を正しく支配することによって、「自然」の能力を発見することによって管理能力を身につけるのです。環境を自由自在に正しく管理するのです。この内容においては、専門科目のマスターがそれぞれの分野で必要となってくるのです。私の場合、社会の枠組みにはまるのではなく、列外に身を置き、自分が主体的に経済活動を展開しようと心で決めたのでした。

したがって、私にとって、これらの能力を啓発させていくことが武道における教育の原点ということになるのです。私がどのような能力を身につけようとしたかの種明かしですが、最初に原則論を大事にしました。次に正しい人間関係学を「人を動かす」でおなじみの、デーブルカーネギーを愛読しました。さらに経済力を身につけるために、会社の歯車となることなく、自分で運営する道を選んだのでした。

三 成長過程

極真空手を始めていく動機は様々あると思いますが、武道は精神と肉体の成長過程を通るのです。つまり、指導者の完成度、個人としてあるいは家庭としてのモデルへの達成度という道なのです。さらに、社会生活の在り方も道場生は食欲に求めていくということになります。私の場合、極真の文字にひかれました。それゆえ、道を極めるための道場ということになりました。

人間の成長は、肉体の完成度を目指すことであり、魂は家庭と社会に責任を持つことによって成長するということになります。それゆえ、心の成長は、個人として、しっかりレベルの向上を図り、心の感性を成熟させることを意味するのです。

その意味では、歌の歌詞と同じように、極真空手の教育内容を厳格に遂行せねばならないと思えたのです。その道標としての色帯があり、段位があると考えべきです。道場生は、今までの極真空手の教えを忠実に全うするという高速道路のような軽い責任のみが要求されるといっても過言でないのです。武道における諸先輩が成長していった過程があるので、道場生は、わずかな努力で恩恵を受けるのです。私も実践空手のなんたるかを大山

総裁から惜しげもなく与えられてもらいました。

したがって、道場生の責任は、指導者に対する従順であるべきで、指導者が道場生を教育することが原則であるという理屈になるのです。すなわち、指導者が自分の歩んだ極真空手道を道場生に教育することが原則になるのです。

四 理念

極真会館手塚グループの教育の理念は、「家族」「対話」「自然」という三つの内容を打ち出しています。つまり、道場生が成さなければならないことは、道場でしっかりとした人格を形成しなさいということになるのです。人間として恥ずかしくない人物を目指すのです。

次に、夫婦となって、家庭をつくることができるように、夫婦の調和が備わるように教育するのです。ある意味で、私たちは、強いだけの人間不適格を作るつもりは毛頭ないのです。人間生活が営まれる人格像を指導者は道場生に要求するのです。

最後に、「自然」という内容は、環境にやさしい人になれということです。エコ社会の実現なのです。つまり、愛情を持って生活環境を形成し、あるいは、創造し、自然を管理する能力を身につけることなのです。この三つの内容が教育の理念の柱なのです。私は人生で早くに実践し、意義づけ、価値づけをしたのです。ここまで追及して生きている人はまれだと思いますが、実践しました。単純なことです。当たり前のことです。ここに行きつくために、結構骨ある青春時代を過ごしたような気がします。何と言っても極真会館なのです。

五 教育の方法

教育の理念から、自動的に教育の方法が導き出されるのです。まず、必要なのは道場生一人一人の個性を伸ばしていくための教育ということになります。これは、当然指導者に似ていくための教育が原則なのです。そのための方法手段としての空手であるということは何度も述べているとおりでありますが、空手の型、実践を含めて継承していくのです。そのために、通信教育ではない道場での実践ということになります。

したがって、最初の教育は、人格成長への実践なのです。指導者に似ていくためには、より空手の原点に立ち返り、稽古に励むことになります。そして、指導者が行き着いた境地へと目指すのです。私が人生を検討した結果なのです。

稽古で磨く内容は大まかに三つに分けられるのです。ひとつは、歴史を通じて完成度を高めた空手の技術を学ぶことなのです。すべての疲れを忘れてしまうほど空手道の追及は、道場生の生活に喜びと、表すことのできない探究心の満足につながるのです。当然強くもなるのです。

第二は、稽古における苦しみぬく体験です。自分の未熟さ、勝負の負けた時の悲しさ、辛さの体験なのです。その苦痛が加えられるようになって、自分の胸の中で数えきれない

釘が打たれ、槍が突き刺さるのです。この過程がなければ本物の人間完成へは通じないのです。

第三は、悲しみの心です。世界の人々の悲しみに思いやり、食糧事情で亡くなる人々に思いをはせます。さらに身近では、一緒に歩んでいた先輩が突然裏切っていく姿に悲しみを深めるのです。頑張っていたあの子供とあの親がこの道場での稽古に見切りをつけ、去っていく悲しみなのです。感謝されて卒業とは別ものです。さらに、指導者達の裏切りも含まれてくるのです。当然割り切ることはできるのですが、そのことゆえに、指導者も道場生も教育されていくのです。

このような心の教育は、合宿、審査会、大会を通した指導が考えられます。日常的には、小説、詩、音楽、絵画、演劇、ラジオ、テレビ等を通して、心の教育を果たします。

ここで、教育になくてはならないことは、第一に、指導者が親の心をどれだけ持てるかであります。第二に、道場生をこの上なく愛して「私たちの先生が私を最高に愛している」という実感を与えられることです。第三に、道場生のすべての身のことに細心の配慮を持って見守ってやらなければならないのです。道場ではいかなる指導でも、心情的姿勢を持って全力投入しなければならないし、その時に、道場生は、深い感動を受けるようにしなければならないのです。

それゆえ、道場生が、指導者の先生に対して、心から尊敬して愛したくなるように真心をこめた指導を原点としなければならないのです。このような道場生達の、指導者の先生に対する尊敬が厚くなればなるほど、道場生は先生の姿に似るようになり、その先生から言われることならば、何でも従おうとするまでになるときは、先生のためなら、生命も惜しまないとなれば、最高の指導ということになります。

六 規範教育

この内容は、成人し大人になって家庭を守るための準備とって過言ではありません。男女が一緒になった場合、調和できるような教育ということになります。すなわち、夫婦になれる資格を備えさせる教育です。そのために自己を律することができるように規範教育を施すのです。

人間の原則的な内容の確立とって過言ではないのです。個人道徳の確立は当然であります。これは、孔子孟子等先人の教えを請うまでもなく、純粹、正直、正義、節制、勇氣、知恵、克己、忍耐、自立、自助、自主、公正、勤勉、清廉等の内容です。もちろん、このような教育は心の教育と併行されなければならないのです。このような規範のために愛情が冷却するならば、規範は形式化してしまうのです。

さらに、人間における人倫、道徳というものは、縦的及び、横的価値観があります。縦的には、父母の価値観があり、子供の価値観があります。それに付随して師の価値観があり、弟子の価値観もあります。横的価値観としては、夫婦の価値観があり、兄弟間の価値観があり、同僚、隣人、地域社会とあるべき価値観があるのです。

この内容は、宇宙を貫く秩序と法則の価値観であり、生涯にわたって身につけなければならないし、教育すべきなのです。このような観点は、学校では学ぶことができなかったのです。どちらかといえば、東洋思想を学んだとき、つまり、孔子孟子の思想に触れたときに考えさせられたのでした。

七 技術教育

社会に対するあらゆる知識を獲得しなければならないのも、私たちです。さらに、創造性つまり、創造能力を開発するための知識と技術を習得させなければならないのであり、必要な知識、学問を学ばせることです。おもに、自然を愛する科学が必要であることは間違いないのです。さらにそれ以外の関連分野、たとえば、政治であったり経済など、社会、文化等に関する学問も相談に乗ってあげる必要もあるのです。

技術教育に関して、自然界に対する管理の直接的な技法としての教育ということになります。

上述した内容を踏まえての、武道教育ということになるのです。それは、まさに、体力の向上であり、自然界にたいする管理の主体者としての管理能力が武道を通じて学ぶ必要は当然なのです。

人間は既に、生まれる時から可能性を持っているのですが、これを現実的に発揮させるためにこのような管理教育が必要であるのです。当然何度も話さなければならないのですが、知識教育や技術教育は、心の教育と規範教育を併行させなければならないのです。これが本当の意味での均衡教育でなければならないと主張します。

このような均衡教育を通して、はじめて科学技術を良き方向に調節していくことができるし、環境問題や、核開発の脅威から逃れることができるのです。このような均衡された教育を通して、指導者の先生は師としての権威をしっかり持つことができるのです。

八 人間像と教育

教育の目標は、要するに一定の理想的な人間像に育て上げることなのです。すなわち、その中心に指導者がいるかどうかを考えられます。第一に、人格の世俗的概念は、一定の特性と良識と健康を備えた人間性を言うのですが、極真空手の指導は、指導者を見習った人格を目指せと主張します。

武道理念に沿って、心情大切に、手塚グループの理念に則った生き方になるのです。第一に、人格者としての姿は、師範に対して忠孝の姿勢を持っており、犯罪に対しては敵愾心を持ち、さらに公憤心を持つことになるために、昨今騒がれている覚せい剤問題に手を染めるような人格はきっぱり自己責任で否定するのです。

さらに、多くの人々に対しては、温情あふれる姿勢を備え、温和、謙遜の徳を高めるのです。法度と愛の実践者であるから最も穏やかでありながら厳格にならざるを得ないので。さらに最終的には法度より愛を先立たせることに一生懸命になるのです。

第二に、規範教育によって形成される人間像です。規範教育の直接的な目的は、家庭人としての資格を持ち夫婦として互いが調和することのできる人間を育てることです。家庭人は家庭自体のためのみならず、地域社会のためにも存在するのです。したがって、武道の精神を通して家庭人としての規範を習得した道場生は、社会生活において、いかなる立場にあろうとも、規範をよく遵守する市民にならなければならないのです。

第三に、人間はすでに生まれた時から、無限な可能性をもった創造性を賦与されているのです。しかし、その能力を最大限に開発させるには、教育が必要であることは言うまでもありません。大部分の人間は、生まれながらにして天才的素質を持っているのですが、正しい教育を受けていないためにごくわずか少数の人を除外して凡才にとどまっているのです。

第五章 極真空手教育指導内容

第一節 手塚グループの指導

現在の手塚グループの運営は、世界のモデルを形成し、盤石な教育基盤を築き上げる観点に立つならば、まだまだ改革改善の余地があります。確かに、三十数年余りの歳月、全員が努力を重ねてある程度の教育の形態は整ってきました。しかしながら、確実によき人材を教育し素晴らしい人格者に育成するためには、明確なビジョンと目標、そして教育戦略が必要になってくるのです。

緩慢な教育ですと、現状維持が精一杯で、社会に一石を投ずる人格者を育成する使命が薄れてしまいます。それゆえに、今は私たち極真会館に携わる者の精神的立場を重視しているのです。指導者が、現実の生活に追われるあまり、空手指導の動機・姿勢があいまいになってはいけません。

教育は、段階的になさなければならないので、人材育成の流れにおいても、人格レベルの尊重を考慮しつつ、確実に各段階、各期間の中で、教育目標を全うできるような体制をつくっていかなければならないのです。この「新しい極真空手」は、そういった精神的立場を道場生に理解してもらうための解説書です。

はっきり、精神的立場を打ち出して、教育指導を充実させ、道場生の成長、そして技術の習得を明確にし、極真空手を学ぶ道場生を多く育てていきたいと思うのです。

子供達の教育は成長段階ですので長期戦です。毎月確実に生徒を成長させるためには、流れる川のような教育の流れを作り、そして絶えずポイントをチェックし、決してその川の流れがよどんでボウフラがわからないように指導するように心がけるのです。

第二節 指導体制の概略

一 体制

① 新道場生から黒帯の指導者まで、全員が一丸となって教育体制を築くのです。そのためには、段階の組織を明確化し、師範と、師範代、支部長責任者が、連絡をよく取り合い、各責任者が盛り上げていきます。師範を中心として各責任者が体制を確立させます。ここで問題になるのが責任者間の信頼関係です。お互い欠点があるのであれば、その点は補い合い長所を見つめて付き合うことだと思います。

② 段階的教育をしっかりと取り組みます。オレンジ帯から茶帯まで10段階の教育内容に沿って、各段階の、組織と責任を明確にし、子供たちがスムーズに成長できるように、心のつなぎ（心の糊代）を充実させます。

二 流れ

① 新規入門者・教育・合宿審査・大会と一貫した流れを作り、一日の教育、一週間の教育、一か月、一年の教育を明確にして、期間を区切った教育を展開させていきます。

② 稽古中もその前後も、気持ちと事情・環境を知ってあげて、責任者が関心を示すことによって流れる川のような教育体制を築いていきます。

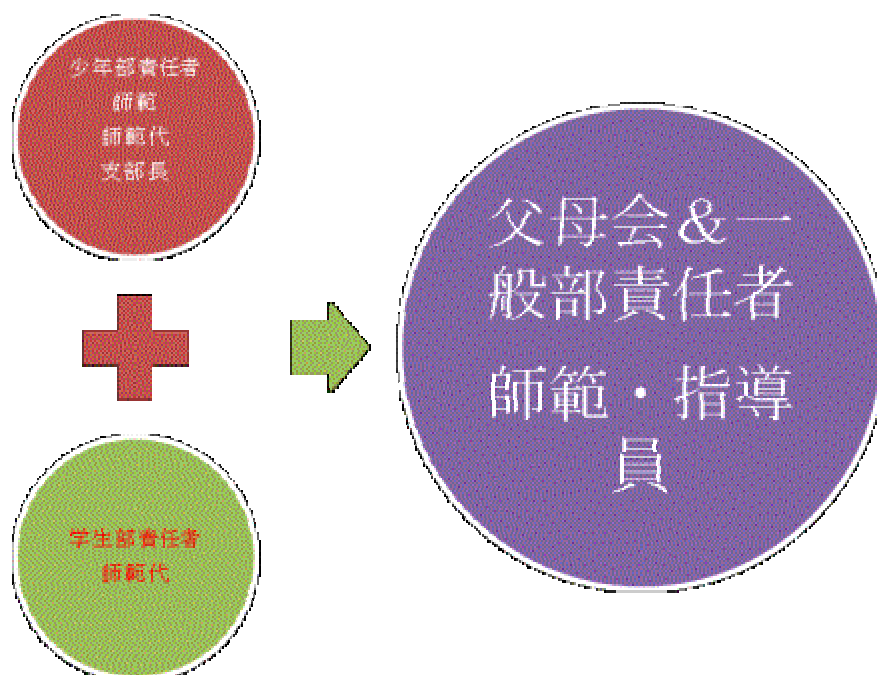
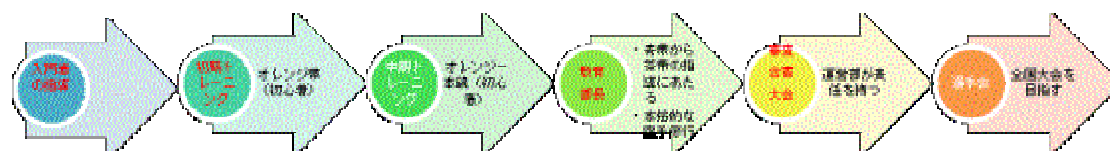
③ 小学6年までに、3級を習得し、それから6年ないし10年で黒帯を取る体制を崩さず毎月の目標を全うしていく教育をします。一般部においては、社会的経験も踏まえて、級を上げていきます。

三 教育

① 教育の流れに対し、決して機械的に取り組むのではなく、家庭的な愛情を抱きながら対処します。指導者は親の如く、父兄には教育を任された責任あるものの如く、決して排他的になるのではなく、道場生にあった段階的教育と技術の習得、知情意の人格体の啓発を優先する愛情教育をおこないます。

② 各指導者は、会議を生命視し、現状を報告しあいながら、意識統一と全体を網羅し、細部にわたって子供達の成長を見つめ、さらに、師範を中心として、教育に対して絶対レベルを高めていこうという気持ち大切に、極真魂のレベルを上げながら教育にあたります。

第三節 具体的な教育 組織&流れ



スケジュール

一日・一週間・一か月の公的なスケジュールを決め、絶えず、ご両親と気持ちを一つとして意識の統一と愛情作りをして、空手に打ち込める時間を確保します。

日間スケジュール

朝・昼・晩の三部制に分けて、一日の予定を確認すると同時に、予定表ではなく、決定し

た事柄を特に記入していくようにします。

週間スケジュール

一週間の流れを何種類かに分け、一週間の歩みを決めていきます。

- ① 道場生として稽古を確保するスケジュール
- ② ①+審査会までの準備のためのスケジュール
- ③ ①+合宿までの準備のためのスケジュール
- ④ ①+大会出場までの準備のためのスケジュール

目標

目標は、

- ① では、しっかりと普段の稽古を実践します。その土台の上に、
- ② では、審査会合格への準備を整え
- ③ では、合宿では生活基準の訓練をしますので、しっかりとした準備を整え
- ④ では、大会で優秀な成績を上げることを検討する。

道場生が最後まで稽古を続けて、頑張るためには、より多くの夢と挑戦をスケジュールに載せて、最初の動機を正すことが重要になってきます。道場に通って、段階ごとの行事をこなす中で、流されてしまい、なかなか空手を継続していくことができないことが予想されます。その意味では、審査会、合宿、大会と参加する目的と動機を正すためのカウンセリングが必要になってきます。当然、終わった後の評価もしっかりしなければならぬとおもいます。審査会に関しては、成績表の配布をいたします。

月間スケジュール

週間ごとの目標を決め確実にする。

二

新しい入門者への責任的立場

新しい入門者には、空手の意義と価値をしっかり指導します。新しい道場生が安心して教室に馴染むように気配りを行います。ある意味で、指導者として立つものが、新しい道場生を把握し、方向性を決めておく必要があります。しっかり両親と打ち合わせます。そして、各教室の指導者との連絡・相談を密にして、あたらしい道場生が生かされるように

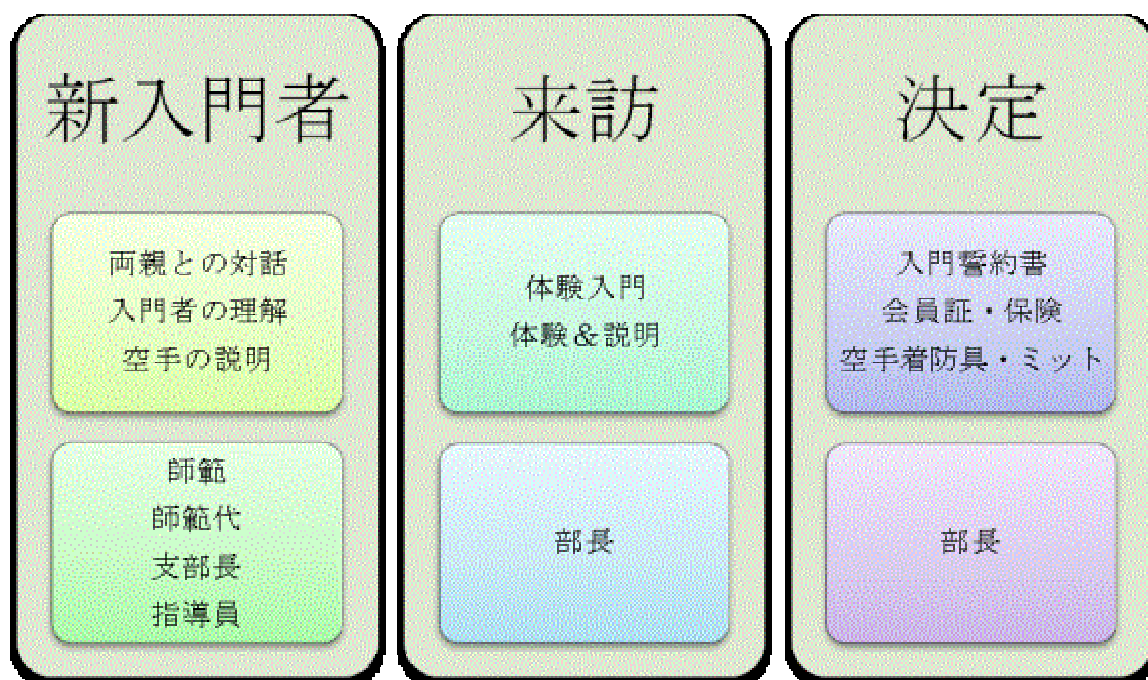
いたします。

指導員による新しい入門者の指導

新しい入門者の教育は、新しい道場生の未来に関わります。車で例えたとしたら、エンジンに相当します。その意味では、会議の中心的柱になります。指導員がしっかり新しい子供たちを意識します。ゆえに、よりよく、新しい道場生を中心とした連絡会議がもたれるのが好ましいのです。そこで、新しい道場生に関する指導を決定していきます。

1 新しい道場生が再来する中で、個性をしっかり理解します。道場に入門して新しい入門者が気持ちを害するようになると大変なことにもなります。特に、両親から課題をしっかり聞きます。全く世間では展開されていない伝統だけに、慎重にお話します。

2 体験入門において、空手に対する理解、可能性もここで把握し、選手コースへの将来性も検討します。



来訪1 → 担当者が道場の内容を新規道場生の父兄または本人に説明します。

- ① 挨拶、自己紹介はもとより、道場の説明をして、より良いコミュニケーションを図ります。
- ② 道場に来られる環境の把握を聞き、これにより、いつどの時間に来られるかを確認します。
- ③ 何故空手をしようとしているのかの動機を確認します。
- ④ 当然問題になるのは、本人の生活環境や家庭環境であります。生活信条をお聞きします。

⑤ 空手を通して、可能な価値観を理解してもらいます。

来訪2 空手道場の印象を聞きます。このときに入門をどうするかも聞きます。

1 コミュニケーションが重要であることは間違いないのですが、一回目の体験入門のときの印象を十分聞きます。さらに、確認できなかったことを十分聞き取ることが重要になってきます。さらに、もう一度空手を習う動機を確認します。

2 家族の把握と、母親の姿勢受け止めていきます。

3 日程の確認をいたします。

教育の責任的立場

新規と教育は車の車輪のようです。各教室の指導者がその中心的役割を果たします。教育を行うものとしての重要な内容は、教育に対する姿勢であると思います。

道場生は新しい道場生ですから、教育部として、好むと好まざるにかかわらず、私たちはどんな人でも受け入れていくのです。その時に、新しい入門者の中で、空手に対して意欲を持って行こうとする道場生達ならいいのですが、問題は中には事情を抱えた道場生、事情はなくても意欲をこれから啓発しようとする道場生です。

そこで教育としての心構えですが、教育全体が、どんな子供たちでも立派になるという確信を持ち、どんな人でも空手教育しようとする意欲であると思います。

初級トレーニング（白帯～オレンジ帯一本線）無級から9級

トレーニング期間二年 審査・合宿は3回以上 年に二回が望ましいのです。

① 目指す目標に向けて、基本的な空手内容を理解する。空手を習う目標は指導者のようになることを子供たちは思いますから、理想的モデルをいつも提示できるようにします。

② 空手の技術的な内容の習得 基本 移動 型大極1・3

③ 挨拶、礼儀作法、元気で明るい子供としての確立

中級トレーニング（青帯～黄色帯一本線）8級から5級

トレーニング期間は二年 審査・合宿は3回 年に二回が望ましいのです。

① 目指す目標は、指導者のようになりたいと思いますから、指導者が自己を確立し、子供たちのモデルとなります。

② その目標としている指導者として自覚します。いい加減な生活で帯では上がらないことを明確にし、楽しく指導します。指導者の人格が問われます。

③ 空手技術に対する基準と理解 ピンヤン3までです。

④ 礼儀作法の徹底 家庭における報告、相談、連絡ができる子に育てます。

⑤ このレベルから大会にでることによって戦いを学びます。自分に打ち勝つことに目覚めさせます。

- ⑥ 親のために生きる生き方を学びます。
- ⑦ 同じレベルの道場生との調和できるようにします。
- ⑧ 自然の素晴らしさを体験し自己管理できるようにします。自然に対する感謝できるようになります。

上級トレーニング（緑帯～茶帯一本線）4級から1級

トレーニング期間は三年 審査・合宿は3回

- ① 絶えず自分で精神統一できるようにする。目指すは指導者であるから、指導者として偽りなきよう努力します。このくらいの子供には誤魔化しは利きません。
- ② 空手の技術も高まるようにします。 実践組手の習得 型ピンヤン4・5 ヤンツー サイファ ゲキサイ小・大
- ③ 自己との戦いができるようにします。当然大会にも参加します。（型）でもよい。
- ④ 礼儀作法とごまかしのない生活 報告・相談・連絡ができる。
- ⑤ 指導者としての訓練 指導者として、前で技術的、精神的指導ができるようにします。
- ⑥ 親だけでなく、多くの人のために生きられるように生活します。
- ⑦ 先輩としての確立をなし、道場生と融合できるようにします。
- ⑧ 自然を愛せる人格の確立にそだてます。

指導者トレーニング（黒帯初段）

二段は二年 合宿・審査・大会のサポートをし、合宿・審査は1回

黒帯はゴールではなく、自己創造の出発であること明確にすべきであります。

- ① 師範の良き内容を継承し、新たな自己の境地を開拓します。
- ② 空手の技術がすべてにわたりマスターするように努力します。突きの型
- ③ 指導を通して指導者としての技術と心をマスターします。
- ④ 空手道を通して、人間としての規範 指導者としての位置を体得します。

指導者実践コース

- ① 武士道の思想の習得を目指す。
- ② 空手の基本・移動・型・組手の習得を目指します。
- ③ 責任指導できるようにします。

指導者コース（黒帯二段）

三段は二年 合宿・審査・大会をサポートし 合宿・審査一回

利他主義に生きる人が取るべき資格です。社会のためにふさわしい人材として出発していきます。

- ① 社会的な人格者として確立します。

- ② 技術的に空手道の本質を究めていきます。
- ③ 自らの人格を見本とし子供たちを指導します。

指導者コース（黒帯三段）

空手道生活の徹底で、四段は合宿・審査・大会をサポートし合宿・審査一回
自然の理法に従って生活できるようにします。社会生活で迷惑をかけない人格を築きます。
自然の理法とは、宇宙の縦の秩序の法則と横の秩序の法則をいうもので、これは正しく宇宙を貫く法則であります。これを人間社会に当てはめて、人倫・道徳となるものであり、人間社会の価値観でもあります。

縦では、慈愛・孝誠・忠誠・敬服・尊敬 横では、和愛・友愛・和解・寛容・義理・信義・礼儀・謙遜・謙讓・奉仕など立体的人間関係を確立します。

個人的価値観にすると、個人的道徳として純粋・正直・節約・勇気・智恵・克己・忍耐・自立・自主・公平・勤勉・清廉等をめざします。

- ① 空手道への努力 セイエンチン セイパイ スウシホ ガリュウ カンクウ 教室の拡大
- ② 道場の貢献と調和します。

選手会

選手会は、特別なモンスターを作るつもりは毛頭ありません。

あくまでも、社会をリードしていく指導者の育成であります。

しかし、全国から注目される選手を作るのも使命であると思います。注目されて倒れてしまうようでは極真空手の修行と全く異なるので、一生通じての人間性の確立です。

- ① まず、道場の指導者に似ていくことです。指導者は安易にしていられません。自分のレベルが選手会の運命を決定します。
- ② 武士道を生命視する生活
- ③ 武士道を実践する生活
- ④ 率先して、目標を立てて実践する生活
- ⑤ 両親や先生に報告、連絡、相談する生活
- ⑥ 朱に交われば赤くなるがごとく、悪に対しての分別力を持つべきです。
- ⑦ 指導者として多くの人を面倒見ようとする心
- ⑧ 道場生同士との融和
- ⑨ モノに対しての管理 整理整頓ができるようにします。

このように、選手会は、精神的成長を空手道として達成するためのセクションです。

審査

当道場では審査会は、道場生が、自分のレベルを上げるために参加を義務づけています。1年につき2回の審査会に参加することになります。春秋と機会は4回ありますので、しっかり導きます。初級は二年で3回、中級も二年で3回、上級は三年で3回とし幼稚園児からだと、小学6年で3級を与えることができるようになります。当然、一生懸命に努力するならば、期間を早めての1級クラス入りすることもあります。審査会の意義は、道場生を最後まで復活させながら導くためにあります。最後まで空手道を全うさせるための動機の整理ということでもあります。各道場での練習ではそれぞれの基準になるので、全体のレベルの再確認となります。そして、審査会のもっとも大切なことは、帯が上がることによって、動機が正されるということでもあります。審査会は最大の武道教育ということになります。クラスが上がることによって生き方の転換が図られる。今失いかけてつある「家族」、「対話」、「自然」を愛する価値観がここで成長します。一般部も、同様に成長するが、期間は社会的経験を加味しながら対応します。なお、黒帯の昇段クラスは、1000日修行の一環となります。

合宿

年2回の合宿、道場生総動員の体制で臨みます。審査会もこの中で行われます。合宿での教育内容は

- ① 基本的武道精神の確立
- ② 空手道を学んでいくための動機の確認
- ③ 空手の習熟度の確認
- ④ 師範と道場生との関係の確認
- ⑤ 道場生同士の助け合い

具体的な手段は

- ① 審査会での修練
- ① 少年部空手の基本・移動・型・組手の習得を目指します。
- ② 上級者のスタッフ起用
- ③ 合宿交流戦
- ④ 手塚会長講和・師範セミナー
- ⑤ 選手会の試合での勝利の報告
- ⑥ 合宿だけの特別訓練
- ⑦ ビンゴ等、交流会
- ⑧ 楽しい食事会

大会

新人戦は、選手会へ参加の登竜門であり、各地方、あるいは全国大会は、原則として選手

会から出場することになります。選手のゴールは、大会で優勝することも重要ですが、道場生のモデルになることが、師範の願いです。空手道を努力して歩んだ姿が大会では現れます。まず、選手会の練習の中での努力の姿、一生懸命空手道を追及しようとしている姿が、道場生の心を打ちます。そして他の大会に出て、勝利すればその努力をみんなが見習うのです。そこで、我が道場の方針は、ただ優勝したからではなく、

- ① どのぐらい一生懸命空手道に励んでいたのか師範が見る基準です。
- ② 空手の技術をどのぐらい習得したのかも次のポイントです。
- ③ さらに、その選手が、家庭で、道場で、どのぐらい報告をし、連絡をし、相談をし、青少年としてどれだけ健全に育っているかもポイントになります。
- ④ さらに自宅でのコツコツとした練習であります。
- ⑤ 当然、大会での一瞬一瞬の戦いに勝利できる生活をしているかであります。
- ⑥ さらに、両親のために、道場生のためにどれだけ生きているかである。これは、将来社会に出て、指導者としての風格につながります。
- ⑦ 特に、物を大切にすることを養い、整理整頓を身につけることも大事であります。

最後に

極真会館手塚グループは、教育、特に「家族」「対話」「自然」をモットーとして活動しています。

一般社会では、教育の見直しが叫ばれていますが、私たちは、武士道に則った思想、それに沿った教育を行わなければならないと思います。

あいまいな目的もはっきりしない教育では人は正しく生きられないし、喜びも生まれてきません。責任者は、組織・目標・スケジュールといったものをしっかりと管理し、環境を整備して、指導することが大切だと思います。

そういう土台の上に、限りなく心を投入して目標に向かって、どこまでも前進していく心を指導していきたいと思います。私たちは教育を新たに作る次第です。